高速戦艦「赤城」1

帝国包囲陣

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　　画　佐藤道明
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

序章　9
第一章　連合艦隊旗艦「赤城」　19
第二章　南海の封鎖線　37
第三章　猛然たる星条旗　69
第四章　反撃の銀翼　99
第五章　マニラ湾口の火柱　161
第六章　航空主兵の翳り　205

沖縄
那覇
北大東島
南大東島
宮古島
石垣島
西表島
沖大東島
沖ノ鳥島
太平洋
サマール島
レイテ島
ミンダナオ島
モロ湾
ダバオ
パラオ諸島
バベルダオブ島
コロール島
ペリリュー島

東南アジア広域図

福州
台北
台中
厦門
台湾
広州
台南
香港
高雄
トンキン湾
海口
バシー海峡
海南島
三亜
フィリピン
ルソン島
西沙群島
マニラ
ミンドロ島
南シナ海
パラワン島
パナイ島
ネグロス島
ボルネオ島

高速戦艦「赤城」1

帝国包囲陣

序章

曙光が差し込んだ直後、けたたましい音が、トラック環礁の穏やかな湖面を騒がせ始めた。

春島、夏島の飛行場や水上機基地、艦隊の錨地、夏島にある第四艦隊司令部、第四根拠地隊司令部に、空襲警報が鳴り響いている。

艦隊の錨地で出港を待っている乗員や、飛行場、水上機基地で待機している搭乗員、整備員らは、茫然とした表情を浮かべている。

ほとんどの者が、現実を呑み込めていない様子だった。

「索敵機からの報告電によれば、敵機は〇四五九（現地時間五時五九分）時点で、夏島よりの方位八五度、九〇浬まで接近しております」

主要幕僚と共に司令部棟の作戦室で待機していた第四艦隊司令長官井上成美中将に、通信参謀岡田貞外茂少佐が報告した。

この日――昭和一六年一〇月二〇日の三時四〇分、内地の連合艦隊司令部から第四艦隊司令部に緊急信が届けられた。

満州の帰属問題を巡って対立関係にあった日米両国が、この日の三時三〇分を境に、戦争状態に入ったのだ。

第四艦隊では、日米関係の悪化に伴い、管轄下にある内南洋の島々――トラック、マーシャル、マリアナ、パラオにおける警戒を強化し、毎日のように航空偵察を実施しており、この日は三時五〇分より索敵機を発進させた。

空襲警報は、それらの一機が打電した「敵戦爆連合大編隊見ユ」との緊急信に基づいて発せられたものだった。

「何故、トラックに……」

参謀長矢野志加三大佐は、信じられない、と言いたげだ。

幕僚たちの取りまとめ役に相応しからざる、うろ

たえたような声と表情だった。
井上は、それには応えず、壁の時計を見上げた。
現在の時刻は五時一三分。
水偵が急を報せてから、一四分が経過している。
航空機の速度から考えて、敵機は二〇分かそこらでやって来る。
「各隊に命令。上空警戒、第一配備！」
「連合艦隊司令部に緊急信。『我、空襲ヲ受ケツツ有リ。〇五一三』」
「泊地内の全艦船、航空機を避退させよ」
井上は、矢継ぎ早に命令を発した。
第四艦隊はトラック環礁を中心とした広大な海域の警備を担当するが、指揮下の兵力はさほど大きいものではない。
麾下の艦艇は、独立旗艦の練習巡洋艦「鹿島」、旧式軽巡二隻から成る第一八戦隊、機雷敷設を主任務とする第一九戦隊、旧式駆逐艦を中心とした第六水雷戦隊、潜水母艦一隻と中型潜水艦九隻から成る第七潜水戦隊であり、重巡以上の艦は一隻もない。
他に、基地航空部隊の第二四航空戦隊を指揮下に収めているが、同部隊はパラオ諸島にいる。
トラックにある兵力だけで、一〇〇機以上の敵機に対抗するのは不可能だ。
ここは、被害の低減に努めるのが最善だ。
「司令部は、四根（第四根拠地隊）司令部と共に防空壕に避退」
井上は、矢野に第四の命令を出した。
本来であれば、独立旗艦の「鹿島」に乗艦し、全在泊艦船を率いて避退すべきかもしれない。
だが、井上以下の司令部幕僚が乗艦するまで待機させたのでは、「鹿島」が撃沈される恐れがある。
また、敵の出方が分からぬ状況下で、司令部が逃げ出すわけにはいかない。
夏島に留まり、内地の連合艦隊司令部に情報を送るのが、自分たちの役割だ。
井上が、矢野以下の幕僚と共に司令部棟の外に出

ると、眩い陽光が目を射た。
夏島の地上には空襲警報が鳴り続けており、周囲は騒然としている。
第四根拠地隊の士官、下士官、兵が走り回り、怒鳴り声や命令、復唱の声が聞こえて来る。
飛行場では、対空砲陣地が射撃準備を整え、水上機基地からは、零式水上偵察機、九七式大型飛行艇といった機体が次々と離水にかかっている。
航続距離が短い機体は、一旦空中に退避するだけだが、足の長い飛行艇には、パラオ諸島に飛ぶよう命じられている。
夏島の東側にある夏島錨地、北西に位置する春島錨地では、在泊艦船が続々と出港を始めている。
第四艦隊司令部が、内地からの緊急信を受信すると同時に、隷下の全部隊に開戦を告げたため、全機、全艦が戦闘態勢を整えていたのだ。
「航空機はともかく、艦船は間に合わぬな」
井上は、出港してゆく艦船を見て呟いた。

環礁の出入り口に使用している北水道は、春島錨地から約一五浬、夏島錨地からは約二〇浬の距離がある。
在泊艦船の多くは、環礁から脱出する前に、敵機に捕捉される可能性が高い。
巡洋艦や駆逐艦はまだしも、申し訳程度の対空兵装しか持たない駆潜艇、掃海艇といった小艦艇がどこまで耐えられるだろうかと思う。
「伝令！　午島砲台より報告。『敵編隊視認』！」
兵の叫び声が、井上の思考を中断させた。
午島砲台は、トラック環礁の外縁部に設けられた複数の砲台の一つで、夏島や春島の北東に位置している。
その砲台から目撃された以上、敵機が殺到して来るのは時間の問題だ。
「急ぎましょう！」
首席参謀川井巌大佐が声をかけた。
井上は頷き、半地下式の防空壕に向かって駆け出

した。
第四艦隊、第四根拠地隊の司令部幕僚全員が防空壕内に入ったときには、既に夏島の上空は、轟々たる爆音に満たされていた。
爆撃が始まったのだろう、時折炸裂音が届き、微かに地響きが伝わって来る。
「飛行場がやられているようです」
航空参謀の米内四郎少佐が、呻くように言った。
爆発音や振動は、島の南側から伝わって来る。飛行場がある方角だ。
敵は第一撃で飛行場を叩き、トラックの制空権を奪取するつもりらしい。
「開戦の一時間後に攻撃とは。それも、いきなりトラックに来るとは……」
矢野が、絞り出すような声で言った。
第四艦隊司令部では、米軍が侵攻してくる場合、内南洋の最東端にあるマーシャル諸島を最初に攻撃すると考えていた。
ところが米軍は、マーシャルを飛ばして、内南洋の要にあるトラックを、最初から衝いて来たのだ。
開戦してから僅か一時間後に敵の攻撃が始まったことと、枢要部のトラックが叩かれていることに、現実感を持てない様子だった。
「周到に計画していたのだろうな、米軍は」
井上は、ここ一週間ほどの動きを思い返しながら言った。
「米国が我が国に交渉の打ち切りを通告したのは一週間前だ。その後、我が国が交渉の再開を何度呼びかけても、一切無視していた。米軍はその間に、艦隊をトラックに接近させていたのだろう。ハワイからトラックまでは、一週間あれば充分到達できる」
「全ては、計画的だったということですか」
「米国は、慎重に地ならしをしながら前進して来る国だ。交渉打ち切りから開戦までの一週間が、米軍の準備期間に当たっていたことを見抜けなかったのは、我が軍の失敗だ」

「米軍は、この後どうするつもりでしょうか？　トラックを空襲しただけで引き上げるとは、考え難いのですが」
「敵の出方を見る以外にあるまい」
米軍の目論見は、敵機が飛び去ってから、およそ一時間後に判明した。
「通信所より司令部。索敵機より受信。『敵艦隊見ユ。位置、〈春島〉ヨリノ方位八五度、八〇浬。敵ハ戦艦四、巡洋艦四、駆逐艦一五。敵針路二六五度。〇七二二（現地時間八時二二分）』」
との報告が届けられたのだ。
「米軍の目的は、トラックの完全破壊だ。制空権奪取の後は、艦砲射撃が襲って来る。攻撃目標は、防御陣地や基地施設だと考えて間違いない」
井上は、幕僚全員に聞こえるように言った。
「では、我々は……」
幕僚たちの何人かが、怯えたような声を上げた。
トラック環礁の外縁部から夏島までの距離は一〇浬（一万八五〇〇メートル）足らず。
米軍の戦艦が装備する四〇センチ砲、三五・六センチ砲であれば、環礁の外から悠々と巨弾の雨を降らせることができる。
半地下式の防空壕は、戦闘機の機銃掃射程度であれば防げるが、戦艦の巨弾に耐える力はない。
直撃は言うに及ばず、至近弾を受けても、弾着の衝撃で崩壊しかねない。
四艦隊司令部の全滅という最悪の事態が、現実になろうとしている。
井上は、自ら受話器を取った。
「司令部より通信所。GF司令部宛、打電せよ。『敵艦隊見ユ。位置、〈春島〉ヨリノ方位八五度、八〇浬。敵ハ戦艦四隻ヲ伴フ。〇七五〇』」
「『敵艦隊見ユ。位置、〈春島〉ヨリノ方位八五度、八〇浬。敵ハ戦艦四隻ヲ伴フ。〇七五〇』。GF司令部宛、打電します」
通信長の片野幸夫少佐が、命令を復唱した。

驚いた様子も、恐れている様子もない。事態を、冷静に受け止めているようだった。

「環礁内の全部隊にも、警報を送ってくれ。『敵戦艦ニヨル艦砲射撃ノ可能性大。各隊ハ可及的速ヤカニ各島ノ西岸ニ避退セヨ』」

井上は、声を落ち着かせようと努めながら命じた。

戦艦の主砲、特に米戦艦が装備する四〇センチ砲は、三万メートル以上の最大射程を持つ。

島のどこにいようと、逃れられる保証はない。

それでも、東岸に留まるよりは西岸に避退した方が、助かる可能性は高いはずだ。

「今一つ。避退中の艦艇の状況を確認してくれ」

片野の答は、一〇分後に返された。

「一部の艦はまだ北水道に向かっていますが、半数以上の艦が環礁の外に脱出しました。『鹿島』は『空襲ニヨル被害ナシ』と打電しています」

「了解した」

そう返答し、井上が受話器を置いたとき、

「伝令！」

一人の兵が、司令部に駆け込んで来た。

「空中に避退していた九七大艇一機が、水上機基地に帰還しました。司令から長官に、至急基地までおいでいただきたい、との伝言です」

夏島、春島の水上機基地には、第四根拠地隊隷下の第一七航空隊と第二四航空戦隊隷下の横浜航空隊が進出している。前者は水上偵察機、後者は飛行艇の部隊だ。

両隊とも、敵機が来襲する前に避退したと思っていたが、一機だけが戻って来たのだ。

九七大艇であれば、四艦隊司令部の全員が搭乗できる。

横浜空司令の横井俊之大佐は、井上以下の四艦隊司令部幕僚を脱出させるつもりで、大艇一機を残したのかもしれない。

「参謀長、幕僚全員を連れて水上機基地に行け。九七大艇の航続距離なら、パラオまで飛べる」

井上は指揮下にある兵力の保全を優先したが、艦艇を脱出させたことで、司令部幕僚がトラックから避退する道を失った。

敵戦艦によって、四艦隊司令部が基地施設もろとも殲滅されることを覚悟したが、飛行艇一機が健在なら、参謀長以下の全員を逃がすことが可能だ。

「長官は残られるおつもりですか？」

「私は四艦隊の責任者だ。四艦隊の中枢となる基地を放棄して、逃げ出すわけにはゆかぬ」

「それはいけません。長官の御命令でも、それだけは聞けません」

矢野は激しくかぶりを振り、川井首席参謀以下の幕僚たちも頷いた。

「長官が戦争回避のために尽力されたことは、皆が知っています。不幸にして開戦に至った今、長官は対米講和実現のために不可欠の方です。長官を、ここで失うわけには参りません」

「司令部が皆逃げてしまっては、取り残される将兵に申し訳が立たぬ。責任者が残って、最後まで指揮を執らねばならぬのだ。それなら、私が残るのが筋だ。何よりも、君たちはまだ若い。これから、幾らでも御国のために働けるのだ。年寄りから先に逝くのが、順序というものだ」

「いや、ここは参謀長の言う通りだ。貴様が残る必要はない。トラックは俺に任せて、避退しろ」

脇から声をかけた者がいる。

第四根拠地隊司令官の茂泉慎一中将だ。

トラック環礁の警備を担当しており、第一四掃海隊、第五六、五七駆潜隊、第四防備隊等を指揮下に収めている。

井上とは江田島の同期生であり、二人だけの時は「俺、貴様」で話す立場だ。部下の前だが、このときだけは遠慮のない口調になっていた。

「俺は、トラック防衛の責任者だ。敵の接近に気づけなかったのは、俺の失敗だ。最後までトラックに留まり、責任を取るべき立場にあるのは俺だ」

「トラックの防備は確かに貴様の任務だが、トラックも含めた内南洋全体の防衛は俺の役割だ。敵を遠方で発見できず、トラックへの接近を許したことは、俺に責任がある。貴様こそ、四艦隊と四根の幕僚を連れて避退しろ。ここで命を落とすことはない」

井上の反論には、妥協の余地がなかった。

謹厳な性格の井上だが、茂泉につられて、江田島時代の言葉遣いになっていた。

「役割というものをよく考えろ。トラックは言うなれば一隻の軍艦であり、俺は艦長だ。乗員が艦に残っている以上、艦長には最後まで指揮を執り続ける責務がある。だが、艦隊や戦隊の司令部にそのような義務はない。将旗を他艦に移して戦い続けるのが、司令長官の役目だ」

江田島卒業時は恩賜の短剣組だった貴様に、こんな初歩的なことが分からぬのか――茂泉は、そう言いたげだった。

「トラックの重大危機を招いたのは俺だ。俺が部下を残して逃げたのでは、筋が通らんのだ」

「責任を感じるなら、生き延びて、貴様の識見を御国のために活かせ。海軍に奉職してから身につけた知見を全て無にするのは、陛下への不忠だと思わぬか？」

井上は、しばし沈黙した。

このような場で、「陛下」の名を持ち出されるとは思っていなかったのだ。

「こんなことを言っている間にも、敵艦隊はトラックに迫っている。今は、一分でも一秒でも惜しい。早く行け！」

叱咤するような茂泉の言葉を受け、井上は聞いた。

「貴様は俺に、生き恥をさらせと言うつもりか？」

「生還すれば、一時的には風当たりが強くなるかもしれんが、貴様の心は一時の恥を堪え忍べないほど弱くはあるまい」

「四根司令官は幕僚全員と共に避退しろ。長官命令だ――そう言っても聞くまいな？」

「江田島を卒業してから上官の命令に背いたことはないが、今回が最初で最後の抗命だ。許せ」

茂泉は小さく笑った。

井上は、溜息をついて立ち上がった。

矢野以下の幕僚を見渡し、重々しい声で告げた。

「四艦隊司令部は、残存する九七大艇に搭乗し、パラオに避退する。全員、水上機基地に急げ」

第一章　連合艦隊旗艦「赤城（あかぎ）」

1

足早に舷梯を駆け上がると、上部構造物が視界に入って来た。

背負い式に二基が配置された主砲塔の正面に、一基当たり二門の、太く長大な砲身が突き出している。

主砲塔二基の後ろに屹立しているのは、摩天楼さながらの丈高い艦橋だ。

元は多数の支柱が剝き出しになった無骨な形状だったが、昭和一〇年から一二年にかけて実施された近代化改装の結果、長門型戦艦や伊勢型戦艦のような、凹凸の多い形に変貌した。

元号が昭和に替わった日に巡洋戦艦として竣工し、近代化改装後は戦艦に艦種変更された「赤城」。「長門」「陸奥」と輪番で、連合艦隊旗艦を務めている艦だ。

最高速度が三〇ノットに達するため、金剛型戦艦四隻と共に「高速戦艦」と呼ばれることもある。

この「赤城」を最後に、日本海軍は新たな戦艦を建造していない。

その艦の上甲板に、海軍中佐榊久平は足を降ろしていた。

「おう、来たな」

水兵に案内され、作戦室に入室した榊を、いかつい顔つきの将官が笑顔で迎えた。

西郷隆盛を思わせる風貌だ。参謀職よりも、軍艦の艦橋や基地航空隊の指揮所で、将兵を叱咤する役割の方が似つかわしく見える。

海軍少将大西滝治郎。今年一月、連合艦隊司令長官山本五十六大将から強く望まれて、参謀長に任ぜられた人物だ。

榊は少佐時代、航空本部の教育部で勤務したとき、同部の部長を務めていた大西の下で働いたことがあるため、互いに気心は知れていた。

「申告します。海軍中佐榊久平、航空参謀として連

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。